



蜀川夜話
天

中村俊定文庫
文庫 18
338
1





友發端



家分と出る言いつこのり来を
 さく免はす所住の人々似たりこれハ
 かの六とやセとやうはとハま雪成
 のうれと三解のあゝあゝ解の
 金屏の窓と風をふふ師と
 川端の頭を惠すれりこれ
 凡月を眼と一花をこころれ



何やーのね生とゝあまうりう旅と
寐る旅とをまて其の何と秋の夕
その古竹を飾るもむくいつ宿望の
竹扉一あうりや指と居る此
年よりぬふうんはくまの春を
おほりゆくるやも竹花
道きふとまをさるるさるる
かゆくのねいあふりさるる

浪のの芦花に旅人とあまうり
かゝ旅の足るあゝ可凡と花を
石山の月と庚戌年旅をみ
和興あまうり何りくま古の旅を
冬と連るうせいの小川ふき
杯とうふくく旅凡勝る
おきく玉川の館轉と
芦花を旅る海をいそく家

かいれり山嶽のけしき四時
 雪のやゆるく布川山を黄牛の
 き道もかやと蜀川の二字を
 こころ堂を人記あるハぬるま
 人の金銀を日あることよとの
 をちねとありのまゝ手接し
 ちよとのふれを名つちる
 物語と叫物る

宝暦丁丑年冬十月 宗長菴より



達歌之達人舊庵
宗長居士ハ當鵲田の
郷乃出生所一又
五條ノ義助母とん

友原氏ありき若くは
より今川義元より
つゝ故よりより
賢を難華活み

のほそ糧玉度
宗祇居士より
連歌をうけ道歌も
して宗祇の宗をうけ

つき新道の銀範と

しと歌仙み人ね

赤くあゝと

し脚をぬゝに山を

あゝ岩上樹下を

あゝとて風月

あゝとてあゝとてあゝ

あゝとてあゝとてあゝ

新撰筑波集小園の
道之記及小字澤
の山記西のときり
所在 宗祇 乙亥士

牡丹もあひのこ
さしはる中
さうさ 同園の
あつて大板山

のゆと茶屋や
あもあふ土の古墳
あねあふ人のいそく
宗祇居士の文巻

ま中 柳 ぶ
山 ぬきまより
宗 長 居士は
享禄元年 沙生

⑤ ぬいぐるみは 僕
まじ 佳城の ぐまを
うて ぐまを ぐまを
ぐまを ぐまの ぐまに

⑥ ういぬあしは
て ぐま ぐまの
ぐまを ぐまは ぐま
ぐまを ぐまは ぐま

とくすく
し御やうて御
さくふさう
ぬきふさう

人記つふ

文禄二年

武陽郡人末室

書

宗長菴日記拾

初々々々楼よあとの子作麦

如舟

田植とやもゝ旅り何さ記

芭蕉

大井川よ舟あつと一花ろ旅

嵐雪

富士と月庵り気きれ共

如舟

雄子やあゝ多人と教う棒こて

白雪

おゝよりむろと極く志のふ州

素堂

石落りとはく麻の毛筆

如舟

来年と捨ねく月の晴ぬく

し別

春雨のあふやな人をまのりり

露川

ちりり新くふゆる梅香

如舟

きいゝお肩中や燕燕子花 如舟
衣更やれ秋意も情情は 素堂

内裏雛戸の管金う旅寐うか 如舟
木陰よ燕ゝ雨のうくわす 丈夫

安支那と人よ教ふ燕燕子花 嵐雪
けり冬先師の田う旅寐のけり

如舟と誘ひかゝる道陽う旅人道の
吟ふも今の情嘆く先師の昼寐昼寐と
ふ

右かゝる名を名する時雨が 芭蕉
いつゝに縮む手隙や大井川 其角
麦古形は麦麦きく屋の水勢うか 嵐雪

大井川——つゑく屋椿哉
ねとらぬり、ちややの大井川
鮎とんくも軒所つふり大井川
今ふとふふく欠つる萩のふ
五月雨のま吹屋大井川
きりり羽もさくくく雲の雨口
湖とふ越に如意の——くれけ

素堂

桃隣

凉鬼

知月

芭蕉

大州

木節

あゝ濱や時雨結智れ小越ふ
あゝ海うう時雨流るる地ふ
——くれすく陸とくあれく竹生鳴
雪けや十ふり成る大井川
五月雨やうう朝日の大井川
竹々れく飯屋釣針ふ螢う角
菴のちね石こいつくふかくれく

正秀

知月

乙別

露川

許六

支考

し別

如舟如竹といえり人
もてふされ

あさひやう青葉あうり茄子け
馬士ハあうり時雨の大井川
とて

今の義師うつて
又捨るて

紙流り火を解文うりさる筆乃をね
嵐雪

歌仙行

名うりく名を名あうり時雨うり
梢とあうりり紙ふ推果
通一矢のあうり市ん木うりて
熨斗あうりくとんふし
夕暮の中うり月の汐うり
思を踏えり麻のうりむく
素郎

公羽
山岡連中
桃舟
千婦
山這
茶來
素郎

やく菊々ね綿子成布と見え
 三寸の帯のひもや見とあや
 生壁のうちを旭と明る
 帆の山向く雲のうら
 見え見る来よ美のあや
 金紗の神をそ地あや振
 枝の届るね琴^一及腰
 飲身惜み月のもろ

樂輔
 如淵
 画江
 婦
 舟
 來
 這
 輔

荒れりの四十八町り端
 茶よも彌子も^柄柄
 花より新^ししきくあ良の明あ
 釣多うあきく^一久も
 船く^しと千くもあ^しあ^し若^し和^し布
 都生息と見やふ 入
 こい^しあ^しあ^し悟^しあ^し契^しの結れ^し道
 朝日晴のやあ^し 定^しま^しれ

郎
 江
 婦
 舟
 関
 這
 未
 郎

所仙の行^荷何^も鯉の^ろも^り
あしと^くく^ふふ^た速^速
わ^くわ^く惜^む有^るの^山う^つ
嵐^はく^はく^著の^{せん}ま^ま
十^や路^路盤^も合^馬く^士の^又五^郎
小^地の^石り^い唄^のを^こや
わ^く雨^の有^明月^又ま^あれ
り^も鶴^の呵^ふ起^く

輔 江 婦 来 這 輔

ち^ち取^り短^くき^ふ志^ちや^う第^一
口^上ま^も鼓^り満^く来^る
仮^橋く^くく^くぬ^後居^居
目^目有^ふく^く鐘^かま^むく
あ^あの^あの^あの^あ接^接今^今以^以
ま^まの^まの^まの^ま恒^恒も

郎 江 洲 舟 為 執 筆

嵐雪

船
路
り
思
し
結
文
よ
弓
飛
笠
乃
ち
ね

底那交踏波ととくと振先

氷上舟の如く雲とすゝふ

尺
2
尺
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840

不
 の
 け
 を
 月
 へ
 照
 射
 一

ひとつ借りてゐる所

古

如
再

駿府連

大耳

兀子

羊輪

葛木

萩の玉子の床とハ
泳ぐ

塔子湖古書工本

結着るおれハ別ハの着るあり

飯をり
解ふ
所
有
幸
也

古月紅芳華之帶一尺一寸

とくふ心新々道つ

標子——吹矢の翳と候ふ也

重
晴
之
家
亭
の
有
り

子

耳

木

輪

耳

子

輪

十

揚る帆より向くそき産のち
 呼の腰と 噓れま
 初花のつもれも幹を折る
 雄子のあゝ海の軒ふ明の
 鈴掛の袂と東風よひるに
 日ハきよくも出るハ十分
 人參年折むわきおせん売
 かまより積くれーりんのふ

子 耳 丈 輪 子 耳 丈 輪 子

垣石見り畚の燕子のあけく
 足きちりりう昼下りな
 春風もゆいりいり神々
 千セは歌る石のかれ 年
 初いふも今も知世とあ
 庭木をかへに膝のあつ
 茶師さく近道のちハ日月
 結とくす解く叶く何く

子 耳 丈 輪 子 耳 丈 輪 子

焙り茶の葉も川筋を渡る
 子
 新しき習いごとくあるなり
 子
 夏——舟阿ぢのなへ間振る
 耳
 赤きくもり かね山の端
 輪
 是も又花は雀のそものなり
 子
 先着くと音つ 下着
 執筆

四季混雜

喜田

紫や樵夫の耳りる川便
 千婦
 一二餅 嵐の半粒極うり
 素郎
 横書きむくまむむ草うり
 樂輔
 やり交る市の匂いや夕涼
 茶来
 葉のふやかと路の垣の友なり
 山這
 物思ふもつもきなり 知子なり
 知剛
 肘の事れ机の音や瓦ふ地際
 画江

(吉)

柳又冬ハ重の影あり臙月
浦草や冬も笠の影ありめ
夕島り恥り交吐すきりり
三日月ハ伸ふふくハテ哉
くは時秋のふあり枝 俵
笠の影り別是く尺ち零哉
流渚く極ふちの何日か
心まゝり嘆せく樹のまゝハ外

桃舟 竹符 衣六 薰哥 茂陵 田夫 斗南 魚光

叶 餅の煮り時日や油さく
浅桶り尺ちとらぬわ外く氷柱ハ
蚊のちや音く ちりり建
いふーの室も都ぬさ川
羽衣の神りちれくふは月
髻のそてねー 佐ぬ梅の音
ちーいん雪やふちの小雲系
おもまのり波り潮るふち哉

居席 玄路 芥石 雪菜 沾恕 桃里 茶苺 梧竹

山くそ氣をきくき田うふ
草の實来足り水の上
吹流る市又和くいとふ
しりきやあけたりあふ鳥
枯枝ふゆり今朝のを
帷子の標垢さ一月雨
木くくくはゆいと糸のさうふ
あうく表うくする裕う南

茶事棟
朽山
白鵝
古江
尤文
子帝
大燕
仙蝶
竹奴

川く海くき路一羽若より
葉く花をハゆくあうり
け秋のつをきものありハを疎
おときんきくあぬ鯛又あ一つ
おほらおや月をきる流のき
自さく動くぬ朝やあね花
星かえ入帆くのを版うふ
き雨やきうく文る井瓦

麻介
燕波
氷壺
昔我
珥水
北花
竹使
竹裡

大

うくおすやとちを向く啼ゆ

眠江

郊外

葉の花や梢の香いふは

存中
元子

約束の枝切る日ありふ

羊輪

張物うけ枝借まや桃乃ふ

女
綺窓

雛の日や紙の白り花の白ひ

雅堂

あや欠くうきさ——軒の月照

西風

枝うりもゆふもさく柳の角

晋路

夕ぐれの香い櫓もあり涼舟

玉斧

夕暮やその深井の山いくつ

女
翠紅

横見より道くもさくう

大耳

二月十二日赤梅ちよはる
かのち中の白も思ひあきく

おとんさく山のそつぎや紅繁像

鐘山

ひる朝や咲きく夢ハ井割る

金見

縮妻やかく縁よりあきく

乙児

不二の山一日まきくくあり

竹二

ひる朝や午の庭の息く
扇を筆と捨てり清更ほ
但山 居逸

田家

與津

とつり夏と暑き白や麦の中
紫陽花の葉一そて新より
里うけく水窓を絞る清水ふ
夏あけぬ風の力をや唯他り
田のあけぬくくくお純
曙山 百朶 雨町 蓼雨 雪支

女をいづる跡き健う那
角文字ハおれ一の字の柳ふ
女 文櫛

甲陽 豊等

雪ふうやとまきえい忘来林
仙も新を校窓坂の維あり角
雪簑 文川

文川

涼さの酒もあけ牡丹が
卯の玉の神うはのうもた
路橋 桃下

桃下

招唯

浪花 人カ

そ鈴とまふのそり雪く平家時雨
旅人

月と弓池一帯より里道
 風結舟をきほひや銀河
 あきれり夕日あけや川京
 かき川やふもろく飛く風
 常々山僧もくく山さく
 雪のふく麻つて海に葉ふ
 紫や茶抄のありもたけり
 秋風や才とせりしれり

波城 洞里 京 栢 推 金 旧 花 汐 歩 月 近 江 潜 夫 庚 哉

あつさうもくもくぬものや連り花
 着牛や極と人の飽時分
 糸の灯の極き一尺へく螢ふ
 春雨やあけわかれと端より
 乳後ふ七筒を置の田毎う
 唐 天 乃 比 年 草 々
 中 之 年 紅 麻
 秋 ち ぬ 竹 乃 木 乃 咲 俄 の 果
 枯の葉より雪の隙ぬや杜宇

文 素 可 風 巨 州 芦 風 羊 化 為 旅 人

足もとより阿ふなり秋の胡蝶が
まゝ電や荒跡——まゝ岸の雲
硯はふ川く海映く紅の橋
秋もまゝをハかく新く灯籠うふ
傘の下ううまきね重見哉
亭の名もまゝ清くやふ山
其方の葉と中絶きあふま
紋屋り世と隣まゝあふ海か

芦風
茶来
樂輔
千婦
素郎
山這
如潤
画江

水音と志川 矢く下る蒲萄哉
糸もつとほねしきり枝
光もれりえくねや答の男あり
卯のふの日と映く晴より
都うう深く被のふやうか
水仙やあまりむく香も持れ
園雨のりふく腰より更衣

祇園よりせんこ

桃舟
斗南
雪菜
塘瓜
麻介
燕波
昔我

田舎の串清しきま
夕ぐれのはしきま
入日し思ひ切しや
いふ鳥やとくも
帷子の里へれ
雪の夢の秋へ
正面り旭あ
女よ身男と尺へ

為木
兀子
羊輪
キ窓
雅堂
晋路
玉斧
大耳

石山

名月やうけぬ
目しき鼻へぬ
葉の影や旭の
人々皆寐る
あややあふ
凡物を投く
川をけり

為木
曙山
百景
雨町
夢雨
雪支
鯉遊

夕陽や撥桶り汲みたる
味日と香ハ散りて花

酒新
香木

蜀川直話上巻終

昭和四年八月五日
松平文子より受之

後之記



